



1  
そんなことは分かってる

そして、冬はある日、何の予告もなしに終わってしまふ。

わたしは、あいかわらず、この屋根裏部屋にいて、眠くて、寂しくて、お腹なかがすいていた。ベッドに潜り込んだまま、毛布の向こうからくぐもつて聞こえる窓の外の音に耳をそばだてている。

わたしは少しだけ耳がいい。いろいろな音が聞こえてくる。聞こえすぎてしまうときもある。窓の向こうではとつくに街が動き始めていて、電車の行き交う音が低く響き、誰かが物干し台で布団たたを叩く音が聞こえる。意味の分からない声をあげているのは小さな子供だろうか。

子供の頃に戻りたい。いつも、そう思う。でも、そう思うのはいけないことなのだ、いつからか、自分に言い聞かせている。どうせ、もう戻れないのだし、戻れない時間や場所にいつまでもしがみついていたら、

「前へ進めなくなるよ、サユリ」

わたしの中にいる小さな彼女が言う。

彼女の名前はチェリー。わたしがつけた名前だ。理由はいたって単純で、「チム・チム・チェリー」を歌うのがうまいからだ。

「もっと外へ出て行かなくちゃ」

チェリーのアドバイスはいつも正しい。

もういちど繰り返すけれど、彼女はわたしの頭の中にしか存在していない。ただ、ときどき頭の中から小さな投映機が小気味よい音とともに飛び出し、カチリと小さな光がついて、わたしの身のまわりのどこかに小ぶりのメロンひとつ分くらいの光のかたまりを投映する。

その光の中にチェリーはいて、彼女の身長は、ちようどレモン・ソーダの空き壇びんと同じくらいだ。

わたしはマルタ飲料のレモン・ソーダの熱烈なファンだ。部屋の隅に十二本入りのケースを何箱も常備している。飲み干した空き壇が常にどこかに置きっぱなしになっている。

正確に測ったことはないけれど、壇の高さは二

十センチといったところか。チェリーの身長もほぼ同じで、そう考えると、彼女の正体はわたしがレモン・ソーダの飲みすぎで見ってしまう幻なのかもしれない。

というか、まずそうなんだろう。

そうなんだよね、と彼女に訊いてみようかと思うのだが、いや、やっぱりやめておこう、と踏みとどまる。訊いてしまった途端、頭から突き出た投映機ごと消えてしまうような気がする。

彼女のことは誰にも話していない。話すような相手もないし、彼女と話していれば、それでいいような気がしてくる。でも、

「そうはいかないんだよ、サユリ」

チェリーは眉をひそめる。

「いつまでも、こんな屋根裏部屋にとじこもっていないで、街へ出て働かなきゃ」

本当にそうなんだろうか。

わたしのこれまでの人生は、おおむね、いいことがなかった。でも、ただひとつよかったのは、父が遺したこのアパートを引き継ぎ、あくせく働

くことなく、住人たちからいたただく家賃で暮らしていけることだった。

「それはたしかに逆転ホームラン並みのいいことだったけどね——」

チェリーは意地悪そうな目でわたしを睨む<sup>にら</sup>。

「でも、街に出て行かないと、人と出会えないし、そうなると、友達や恋人や未来の家族まで出来なくなる」

「いいの」とわたしは横を向いた。

そんなことは分かっている。

だいたい彼女はいつもわたしがすでに考えていたことを、いかにも、わたしが何も理解していないかのように論そうとするのだ。

「バイバイ。また、あとでね」

わたしがそう言って頭を振ると、投映機も光のかたまりも消えて、チェリーの姿は蠟燭<sup>ろうそく</sup>の火を吹き消したように見えなくなる。もちろん声も。

わたしはあくびをした。

したくなくても、あくびをするふりをする。

もう、チェリーはいなくなつて、誰も見ていないのだけれど。

わたしはきつと、「眠いのを我慢しながら食事の準備をする自分」を、誰へ向けてでもなく演出したいのだ。わたしには、そういうところがある。ひとの目を気にするのはもちろんのこと、ひとの目などないのに、理想的な自分を演じつつける。

ぐずぐずと着替えた。

寝間着からスエットの上下に。

とはいえ、寝間着は上下ともスエットの着古したものだから、着替えても、さして変わらない。それでも、しっかり着替える。「それでも」というのが重要なのだ。

時計を見る。

水色の文字盤の壁掛け時計で、おそらく、この部屋で、オーボエの次に高価なものだろう。

午前九時五十分。

なんとか九時に起きるべく自分を律したいと思

うのだけれど、どうしても、こんな時間になってしまふ。わたしののように、働いていない人間は九時までに起きないと、どんどん駄目になっていく。これは誰かから聞いた話ではなく、毎日繰り返してきた経験から学んだことだ。

これがさらに高じて、十時を過ぎてしまったらもうアウトだ。

口ぐせが「どうせ」になる。

起床時間でつまずくと、その日一日の時間の流れが、すべて投げやりな空気に支配される。

どうせ、急いだって仕方がない。

どうせ、やることなんてろくにないのだし。

どうせ、予定していたことはうまくいかない。

どうせ、誰もわたしに期待などしていない。

というか、わたしには、わたしに期待を寄せてくれるような友人や仲間がいない。少し前には、「運命を共にする」と思っていた仲間がいたのだけれど、彼らや彼女たちと会うことはほとんどなくなつた。もちろん、連絡先は知っていて、携帯の番号もメールアドレスも知っている。でも、連

絡し合うことはなかった。特に用事がないからだ。同じ理由で、わたしは親戚付き合いもほとんどない。そもそも、わたしには家族がない。母は大昔に家を出て行ったきりで、父は心臓を患って、さっさと逝いってしまった。わたしには兄も姉も弟も妹もない。

それだけではない。

よく通っていたハンバーガー屋も、喫茶店も、コインランドリーも、銭湯も、みんななくなってしまった。銭湯の帰りによく見かけた野良猫もいつからか姿を見せなくなり、屋根裏部屋の窓辺にやってきていた鳥たちも、すっかりあらわれない。みんな、そうしていなくなっていく。

いくつもの喪失感が縊より合わされ、それが、「どうせ」のひと言に集約されて口からこぼれ出る。

でも、

「どうせ、ばかりを繰り返す人生なんて最悪じゃない」

チェリーなら、そう言うだろう。



そんなことは分かつてる。

だからわたしは、たとえ変わり映えがしなくても、スエットを着替え、眠たいけれど食事の準備を始める。やかんでお湯をわかし、パンを切って、パンの断面を眺め、冷蔵庫の前に立って、冷蔵庫のおもてに映ったぼんやりした自分の顔を眺める。果物ナイフで小さめのトマトを四つに切り、レタスの葉をちぎって水で洗って、ペーパー・タオルで水気をふきとる。

朝の食事はどんなにささやかなものであっても、自分でつくるのがいい。目が覚めたばかりの、まだ現実の輪郭がぼやけた朝の台所で、パンを切って、パンの断面を眺め、冷蔵庫からバターを取り出してパンに塗っていく。

他のことほかは考えない。他のものは見ない。ただ、パンとバターと自分の手の動きだけを見つめる。そうするうち、わたしはどうか自分が生きているこの世界の住人になっていく。誰よりも遅い朝が始まっていく。

チェリーはわたしが「外へ出て行かない」と言うけれど、そんなことはない。たしかに働いてはいないけれど、外に出るのは嫌じゃない。

窓の外に見える空が気持ちよく晴れていれば、出かけたくなる。いや、空が曇っていても、それはそれで出かけたくなる。いやいや、そればかりか、少しの雨であれば、レインコートを着て出かけてしまふときもある。少々、奮発して買った淡いグレーのレインコートだ。雨の日に着ないで、いつ着るというのか。

でも、アスファルトを叩きつけるような雨のときは屋根裏部屋にひきこもる。そのとき、この部屋が冬眠を始める熊くまの穴ぐらみたいに住心地よく感じられるよう、ランプや本や膝ひざかけのことを、あらかじめ考えておく。

どうして人間は冬眠をしないのだろう。すればいいのに。いや、したいのなら、勝手にしてしまえばいいのか。それは、わたしの自由だ。単に人間がどんなふうにも冬眠をすればいいか、その基準

となるルールが確立されていないだけなのだ。

お湯がわいた。コーヒーを淹れよう。

半年ほど前に貯金をおろして、豆を挽く機械を大きな電器店の棚おろしセールで手に入れた。日本語では「コーヒー粉碎機」というそうだ。紙のフィルターを使い、粉碎されて粉になった豆を濾す。「濾す」という作業を、わたしはこうして身につける。もし、自分でコーヒーを淹れる時間を持たなかったら、わたしは「濾す」ことから遠く離れたまま一生を終えたかもしれない。

自慢ではないけれど、わたしは食べるのがはやい。誰と競っているわけでもないのに、あつというまに食べ終えてしまう。コーヒーもまた同じく、コーヒーとしても不本意だろうけれど、ほとんど、パンとレタスとトマトを流し込むために飲んでい

る。  
誰に似たのだろう。たぶん、母親だ。父は絵に

描いたような穏やかな人だった。決して、パンを  
コーヒーで流し込んだりしない。ゆっくりゆっく  
り、指先で慈しむように六枚切りのいちばん安い  
食パンを食べていた。

母のことはよく知らない。わたしが六歳のとき  
に突然いなくなった。ドーナツをつくってくれた  
のを覚えている。

逆に言うと、ドーナツ以外は何も覚えていない  
のだ。少し前までは他にも何か覚えていたような  
気もするのだけれど、何を忘れてしまったのか、  
それすら分らない。

濃いコーヒーをわたしは好まない。砂糖やミル  
クといったものも、自分でつくるコーヒーには必  
要ない。

出かけるときは、オリーブ色の携帯用保温ポツ  
トに淹れたての熱いコーヒーを入れていく。焦茶  
色の湯気のたつ飲みものをポットに入れ、肩から  
さげるそのときそのときの鞆かぼんに押し込んで出かけ  
ていく。たいていは買いいものに出かける。たまに

電車に乗って、行きつけの美術館へ、ほんやりと絵を観みに行くこともある。

電車に乗ると、ドアの近くに立って、ドアの窓ごしに外の景色を眺める。

第一に雲を見る。第二に家々の屋根を見る。

屋根なんてろくに見たことがないと昔の人は言うかもしれない。でも、いまは電車に乗って、それが高架式の高いところを走るものであれば、窓の外に延々と屋根を見ることになる。

わたしは屋根が好きだ。屋根裏部屋に住んでいるのも、屋根に親しみがあるからだ。さらに言えば、この部屋はこのあたりのどこよりも高い位置にある。街でいちばんの高さと言っていい。つまり、ここはこのアパートの屋根裏であると同時に、わたしが生まれ育ったこの街の屋根裏に位置している。

窓はさして大きいとは言えないけれど、それでも窓から頭を突き出して眺めれば、北から南へかけてひろがる街の全貌ぜんぼうが見渡せる。

都会のターミナル駅から急行で二駅のところに

ある。見渡した街のはるか向こうにはターミナルを擁した巨大な都市を象徴する高層ビル群、切り貼<sup>ば</sup>りされた他の星の風景のように見える。あの天にまで届くような繁栄にくらべて、わたしの生まれた街のにぎわいはずいぶんと可愛<sup>かわい</sup>らしい。小さな商店が密集し、飲食店を除くと、どういうわけか古着屋や古道具屋といった使い古されたものを並べる店が目につく。

そのせいで、人の往来はそれなりにあるのに、どことなく、のんびりとした印象を拭<sup>ぬぐ</sup>えない。それは、おそらくわたし自身の性格にも反映されているだろう。子供の頃から、ずっとこの風景を見てここまで生きてきたのだから。

## 「あのだ」

またチェリーがあらわれた。ちよつと油断すると、いつのまにかお出ましになる。

わたしは小さくため息をついて、冷蔵庫からレモン・ソーダを取り出し、古道具屋で見つけた半

世紀前の栓抜きで蓋ふたをあけた。壇にそのまま口をつけて飲む。氷を入れたコップについて飲むのもオツなものだけれど、すぐに飲みたいときはラツパ飲みに限る。

「なに？」

わたしは口の端をぬぐいながらチェリーに答えた。

「前から訊こうと思っていたんだけど、サユリは子供の頃からこの屋根裏部屋にいるわけ？」

チェリーは姿を見せるたび、ちよつとずつ着ている服や髪型が変わっていく。いまはマッシュルーム・カットが少し伸びたくらいで、ダーク・ブルーにグレーのストライプが入ったポップなスーツを着ている。襟の小さな白いボタンダウンシャツに、細身の濃紺のネクタイを合わせ、足もととはいえば、つま先が尖とがったアメ色のショートブーツを履いている。

（ふうん）と、いつも思う。

どういうわけか、彼女はわたしが絶対に思いつかない、けれども、絶対に一度は試してみたい格

好をしている。

「そうよ」

わたしは短く答えて、レモン・ソーダを飲んだ。物心ついたときから、この小さな屋根裏がわたしの部屋だった。父と母はすぐ下の三階にいて、その下の二階分をアパートとして貸していた。いまは三階も二部屋に改装して貸し出している。

そういうわけで、わたしは都合六世帯の大家なのだけれど、いささか古びてきたせい、六部屋のうち三部屋、つまり半分は空き部屋になっている。

そうしたことを考え合わせると、たしかにチェリーの言うとおりで、家賃収入に寄りかかってばかりはいられない。いずれ、この古びた建物を全面的に改築する必要がある。いまの人生がいつまでつづくものか、先のことは分からないのだ。

「そのとおり」

とチェリーが言う。

彼女はわたしが心の中で言葉にしたものまで、すべて聞きとってしまおう。



「だから、先手を打つの。いい？」

チェリーは、たぶん、若かったときのわたしがなりたかった自分なのだと思う。物事を明るい方へ、良い方へ、希望のある方へと考える。常に陽気で弱音を吐かない。まかり間違っても涙なんて流さないし、仮に五秒間ほど暗い影のようなものがよぎったとしても、

「大丈夫、なんとかなる」

とすぐに影を振り払う。

わたしは、どうあがいても彼女のようになれなかった。

極度の人見知りで、たいていのことをうまく話せず、誰かにフレンドリーに話しかけられても、こわばった笑顔しか返せなかった。胸の奥には、もっと楽しく振る舞いたいという思いがあるのに、どう表しているのか見当がつかなかった。

「でも、サユリには音楽があったでしょう」

チェリーは何でも知っている。それはそうだろう。彼女はわたしの分身みたいなものなのだから。でも、それにしては、わたしのこの暗さという

か、見かけだけとはいえ、優等生風のおとなしさ  
とでも言うのだろうか、そうしたものが微塵みじんもな  
い。うらやましい。そして、うらやましいと思う  
自分が分からなくなる。だって、彼女がわたしの  
分身であるなら、わたしがわたしをうらやまし  
がっていることになる。

そんなはずがない。

「どうして、音楽に戻らないの」

「どうしてって、戻れないからよ」

わたしは声を低くする。

わたしの「音楽」はひとりで奏でるものではな  
い。オーケストラというものがあって、初めて成  
立する。その肝心のオーケストラが解散してしま  
ったのだから――。

「別のオーケストラに参加すればいいじゃない」

ごもつとも。それはまったくもってそうなのだ  
けれど、わたしが心惹ひかれるオーケストラには、  
すでに優秀なオーボエ奏者がいらっしやる。

というか、素晴らしいオーボエ奏者がいるから、  
わたしはそのオーケストラに魅了されるのだ。わ

たしにはその代わりはできない。わたしは優秀じゃないし、素晴らしくもない。わたしには、あの、ところどころ凸凹でこぼこしたような、手づくりのオンボロ・オーケストラがちょうどよかった。

「でもね」

わたしは声に出してチェリーに話しかけた。

「でも、あのオンボロ・オーケストラの仲間たちは、みんな、ガケ下の町の住民だったのよ」

「それが？」とチェリーは、マッシュルーム・カッタを揺らしながら、大げさに両手を広げた。

「だから、何なの？」

「わたしだけが、隣の街の生まれで——」

「隣って言うっても、すぐそこじゃない。現に、その窓から見おろせるし」

チェリーに促されるようにして、わたしは先の東側の窓ではなく、もうひとつの南側の窓辺に立った。その窓はいつもカーテンが閉めてあり、窓どころかカーテンさえ開けることもない。でも、チェリーの言うとおりに、カーテンを開けて、ややガタのきた古びた窓をひらけば、すぐその眼下

にガケ下の町がひろがっている。

でも、ひらかない。

ひらかななくても、分かってる。

そこに、わたしのオーケストラがあった。

そんな言い方は本当のところ正しくなくて、正しく言うなら、「わたしの」は「わたしが所属していた」だ。「あった」というのも、微妙におかしな表現だろう。「オーケストラがあった」と言うと、まるでそういう場所が存在していたかのようには思われる。でも、これは、あながち間違いないかもしれない。

もちろん、オーケストラは場所ではない。演奏者、つまり人間の集まりで、でも、オーケストラと呼ばれるほどの人数が集まって演奏をするとなると、どうしても、それ相応の場所が必要になってくる。

その「場所」が、ガケ下の町のいちばんはずれにあった。皆が集まって練習する場所だ。それだけではない。楽団員のほとんどは、皆、ガケ下の町の住人で、それぞれに自分の身を立てる仕事を

もっていた。アマチュアの楽団、その名も〈鯨オ  
ーケストラ〉。

「どうして、そんな名前なんだっけ」

チェリーが知らぬふりをして訊いてきた。

「もういいのよ、そんなことは」

すでに存在していない楽団のことを、あれこれ  
言っても仕方がない。

ひとつの小さなオーケストラがガケ下の町にあ  
って、構成する楽団員も、その音楽が奏でられる  
ところも、「ガケ下のはずれ」という、ひとつの  
場所に含まれていた。それだけのことだ。いまは  
もう存在していない。

「そうかな」とチェリーはあきらめなかった。

「オーケストラのメンバーはいまでも、皆、町に  
いるんでしょう?」

「知らないよ」とわたしは本当に知らないので、  
そう答えた。あれから、ガケ下にはほとんど行っ  
ていない。

「ほとんど?」

とチェリーは容赦ない。

「そうね——」と、わたしは言葉をにごす。まあ、言葉をにごしたところで、チェリーにはすべてお見通しなのだけれど。

つい、このあいだのことだ。なんとなく去年の手帳をめくっていたら、「坂の下のスーパーへ行って、洋梨を買った」と書いてあるのを見つけた。洋梨が店先に並び始めた季節の、何ら特別ではない、ある日のメモだ。

でも、その日のことはよく覚えていた。ひさしぶりにガケ下の町へ行ってみようという気になったのだ。たぶん、気候がよかったのだろう。晴れ晴れとした思いで、おなじみの急な坂を下り、ガケ下の大通りを渡ったところにある、輸入食品を多めに売っているスーパー・マーケットに出向いた。

そのスーパーでは、オーケストラの練習の帰りによく買い物をしていた。

牛乳、ベーコン、キャベツ、玉ねぎ、豆腐、缶詰、即席麵<sup>めん</sup>——そうだ、忘れちゃいけない、レモ

ン・ソーダも。

重い袋をさげて、あの急な坂をのぼるときも、わたしは鼻唄はなうたを歌っていた。

そんな自分の背中を少し離れたところに見るような思いで、わたしはずいぶんと物色した挙句、洋梨だけを買って帰った。

帰りの坂道は、やけに険しかった。それはそうだろう。行きは下りだけけれど、帰りは上りなのだから。

それにしても、どうしてあの頃は、こんな坂道を鼻唄まじりでのぼれたのだろう。運動不足なのか、加齢によるものなのか、なんだか情けなくなってきた、もうしばらく来ない、と静かに誓ったのを思い出す。

でも、洋梨がおいしかったかどうかは覚えていない。代わりに、指先のずきずきとした痛みが思い出される。

ナイフで洋梨の皮を剥むいていたなら、ぬるっとして手がすべったのだ。空気の乾いた日に指先を切

つてしまうと、驚くほど鮮やかにすっぱり切れる。  
絆創膏ばんそうこうを探したけれど、すぐには見つからなかった。間違いなく買ってあるはずなのに。

仕方なく、旅行鞆の中にしまつてあつた予備の絆創膏を取り出してきて、どうにか間に合わせた。われながら、よく思いついたものだと感心した。というのも、旅行には何年も行っていないかつたし、旅行鞆はクロゼットの奥に押し込んであつたから、日常的には目にしていなかった。

ただ、楽器をたしなむ者としては、とりわけ指先の怪我けがに注意を払う必要があつた。すみやかに手当てができるよう、消毒液と絆創膏は必需品で、旅行に出るときは、「必ず持つていくもの」の筆頭だつた。

その習慣に自分のずぼらな性格を掛け合わせる  
と、旅行から帰つてきて、洗濯すべき衣類はさすがにすぐに鞆から取り出すけれど、絆創膏はどうせまた旅に出るときに必要なのだから、と取り出すこともなく入れっぱなしになっているに違いない、と予測したのだ。



これが、まったくもって予測どおりで、予測を大幅に上回るおまけもついた。まずは、鞆の内ポケットの取り出しやすいところにひと箱見つけ、それで急いで手当てをしたあとに、ふと思いついて、別の内ポケットを探してみたら、そこからもひと箱見つかった。

「結局、四箱も出てきたのよね」

チェリーはあのととき、わたしの様子をベッドの端に腰掛けて見ていた。

「よかったじゃない」と言いながらも目つきが少し冷たくて、

「サユリは後片づけってものが、まったく得意じゃないよね」

わたしに向かってというより、ひとりごとのようにつぶやいた。

そうなのよ。そんなことは分かっているの。分かっているから、旅行鞆に脈あり、と思ったわけだね。「まあ、でも、後片づけをちゃんとしないから、そのまま残っていたってことだよね」

チェリーがポジティブに話をまとめてくれた。

「だからね」とチェリーがわたしの回想モードにピリオドを打った。「サユリは、ガケ下の町にも、オーケストラにも心残りがある。そうよね？」

どうして、その問いに答えなくてはならないのだろう。だって、チェリーは知っているのだ。わたしが、どんなふうを考えているか、なにを望んでいるのか。声に出して答えなくても、もしかして、わたし以上に知り尽くしているかもしれない。部屋の中を見渡した。

わたしの屋根裏部屋。こればかりは、「わたしの」と言いたくなる、わたしの場所。

決して広くはない天井の低い部屋。冬は寒くて夏は暑く、でも、風通しがよくて、なにより子供の頃からためこんできたわたしの所有物がすべて揃っている。幾たびもの大掃除に耐えぬいてきた本とCDと服と――、

「ガラクタ」

チェリーが声をあげる。

「なんだか分からない、ガラクタ」

そうだ。本当を言えば、本もCDも服もほんの

わずかで、じつのところ、この部屋にひしめいているのは、巷ちまたの古道具屋でせっせと買い集めてきた得体の知れないものばかりだ。

もし、アパートの入居者がゼロになってしまつたら、このガラクタを並べて古道具屋を始めればいい。その気になれば、本当にできるんじゃないかと思う。ただし、高価なものは本当にひとつとしてなく、チェリーが「ガラクタ」と声をあげるゆえん所以である。

「シャッターの切れないカメラ、レンズの割れた虫眼鏡、音が出ないラジオ、背表紙のはずれた重たい本、固まったままの絵の具のチューブ——」  
チェリーが部屋の中のアちらこちらに置いてある「ガラクタ」に触れてまわり、「どうして、こんなものを集めているの」と憤慨したように腕を組んだ。

「ねえ」とわたしはチェリーに声をかける。「そんなことより、歌ってよ」

「ダメ」とチェリーは首を振る。「こっちの言うことを、ひとつも聞いてくれないのに、自分ばっ

かり」

たしかにね。じゃあ、分かりました。

ずいぶんと久しぶりだけど、南側の窓を開けましょう——。

カーテンを開け、ロックを解除すると、「よし」と自分に気合を入れて窓を開けた。

途端に風景がひろがる。

まるで、オーケストラの音合わせが済んで、最初の——あのわくわくする最初の一音がたちあがったときのように、わたしの中で閉じられていた窓がひらかれた思いになった。

屋根が見える。たくさんの屋根が見える。

チェリーが、

「すっ」

と息を吸うブレスの音が聞こえ、それから、見えないオーケストラの演奏にあわせて、十八番の「チム・チム・チェリー」を歌い始めた。